



国宝 色絵雉香炉 野々村仁清

古美術優品展

—山川コレクションを中心とした茶の湯の美—

■ 茶道具と名物裂

前田育徳会尊經閣文庫分館

■ 一洋画の先駆者—
佐々木三六展

第3展示室

■ 明治の工芸

第5展示室

■ ハレを描く日本画

第6展示室

■ 新春を寿ぐ

第2展示室

古美術優品展

—山川コレクションを中心とした茶の湯の美—

主催/石川県立美術館

平成24年1月4日(水)~2月5日(日)会期中無休



七人狸々図 狩野常信筆

展覧会の概要については、前号までに企画展トピックとして紹介してまいりました。今回は昭和三十四(一九五九)年の旧美術館開館にあわせてご寄附いただいた作品を中心に紹介します。

●色絵雉香炉 野々村仁清作

山川庄太郎氏寄附

ほぼ等身大の雉の香炉です。京焼の祖といわれる仁清の彫塑的な作品のなかでも秀逸で、緑、紺青、赤などの絵具と金彩で羽毛などを豪華に彩色し、尾を水平に保った姿に焼成するなど至難な技が駆使された緊張感あふれる作品です。庄太郎は戦前から戦後まで命がけで守り抜き、私有するより公共の財産として公開されることを望み、天皇皇后両陛下の行幸啓と旧館開館を記念して石川県へ寄附されました。以来、当館の顔として今日では重文の「雌雉香炉」とともに、第一展示室に多くのお客様をお迎えしています。前田家伝来。

◎西湖図 秋月等観筆 畠山一清氏寄附

中国・杭州にある西湖は古くから景勝地として知られ、文人墨客や禅僧たちの憧れの地でした。本作は画面左上の「杭州西湖之図/於北京會同館/作此圖弘治玖年閏三月拾三日」の記述から、雪舟の高弟・秋月等観が明に渡り、実景を見て北京の客舎で描いた事がわかります。雪舟の《天橋立図》につながる特徴的な山の表現に、師の作風を学んだ秋月の力量が遺憾なく発揮されています。能登国の守護畠山氏の末裔である、畠山一清が、秋月等観、狩野元信、興以、

探幽の《西湖図》四幅を旧館開館を記念して寄附されました。井上世外旧蔵。

◎色絵梅花図平水指 野々村仁清作

石黒伝六氏寄附

やや分厚い筒形の平水指で、全面にわたって、仁清独特の貫入のあるやや黄色味をおびた白釉が厚くかけられ、側面に金・銀・赤・黒・緑などの彩色で梅の老樹を描いています。花は紅梅で、ところどころに金彩や銀彩の梅花をそえて変化をつけた華やかな中にも格調の高い作品です。旧館開館を記念して寄附されました。

□和蘭陀白雁香合 山川美術財団寄附

江戸時代初期頃に我が国に舶載されたオランダの陶器です。細い頸を長くのばした白雁の姿で、胴で上下二つに分かれ、全体に乳白色の白釉が厚くかかり、嘴や目、頸の二本の筋、足などに施された赤絵具が、華やかさを強調しています。優雅で愛らしい趣きの本作の類品は少なく、藤田美術館の作品とともに古来より名高い名品です。新館開館を記念して財団所蔵の一二点の作品が寄附されました。

【関連行事】

◆講演会(聴講無料)

「山川庄太郎翁と

その「コレクションについて」

講師/嶋崎 丞(石川県立美術館長)

日時/1月15日(日)午後1時30分

会場/石川県立美術館ホール

新年のあいさつ

館長 嶋崎 丞

明けましておめでとうございます。

ご承知かと思いますが、昨年十月に石川県文教会館で、第五十九回全国博物館大会が「地域と博物館」のテーマのもとで開催されました。

石川県内に設置されている博物館は、当館を含めてそのほとんどが地域の歴史や文化や自然と深い関わりあいを持って活動しており、本大会を開催するに、正に相応しい土地柄であると高く評価されました。

博物館は、本来地域文化を守り、次世代にそれらを伝えて新しい文化を創造するための力となるものでなければなりません。それがたまたま観光や地域の活性化につながることはありませんが、それらがすべてでないことはいまでもありません。ましてや文化的イベントやテーマパークなどと同列に論ぜられるものではなく、一貫した文化政策の中に位置づけられるものであることを忘れてはなりません。そうした意味で、今後とも地域文化を大切に、地域づくりの拠点として活動を続けて参りたいと思っています。

茶道具と名物裂

1月4日(水)～2月6日(月)会期中無休

呉須染付山水文水指

古赤絵金欄手仙蓋瓶

◆ギャラリートーク

※展覧会観覧料が必要です。
会期中の毎週日曜日午前11時～
(1月8日・15日・22日・29日・2月5日)

◆土曜講座(聴講無料)

「久隅守景の眼差し」

担当／村瀬博春担当課長

日時／1月14日午後1時30分

「加賀の数奇者 ―山川家を中心に―」

担当／高嶋清栄学芸第二課長

日時／1月21日午後1時30分

会場／石川県立美術館講義室(※両日とも)

【観覧料】

() は20名以上の団体料金

一 般 六〇〇円(五〇〇円)

大 学 生 四〇〇円(三〇〇円)

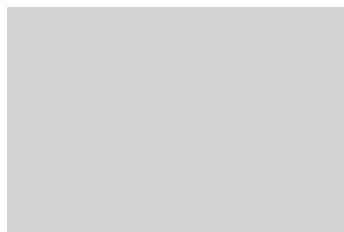
高・中・小 生 二〇〇円(一〇〇円)

学芸員の眼

昭和七(一九三二)年四月から六月にかけて、石川県商品陳列所で開催の「産業と観光の博覧会協賛 百万石文化展覧会」にあわせ、越沢宗見発案のもとで前田侯爵家の厚情により、成巽閣を会場に四月十八日を初日として各席主が三日間を担当し、計十一回(三十三日間)にわたり空前の大茶会が開催されました。席主は本多男爵家にはじまり、中島徳太郎、石黒伝六など金沢の錚々たる数奇者が続き、第六回の五月四・五・六日を山川庄太郎が担当しました。端午の節句や青山緑水の季節感とともに名品を披露したその茶会について、「…只々敬服の外はない。」と越沢宗見は記しています。この様な茶会の記録は、「宗見茶話集」(昭和二十四年、北陸茶道研究会発行)に詳細に記されています。本展では、山川庄太郎の「成巽閣茶会」の一端を再現いたしますので、八〇年の時を超えて、茶の湯の美をお楽しみください。

茶事では茶室の席入りの合図として欠かすことのできない銅鑼を最初に展示します。この銅鑼は初代魚住為楽が、前田利為候に依頼され、皇紀二六〇〇年の記念として昭和十五(一九四〇)年に制作した作者会心の大作です。次の「観音羅漢像」には、白隠独特の温もりを感じさせる禅画の世界が描かれています。観音経の「慈眼視衆生、福壽海無量」の賛が記されていますが、そうした功德に新しい年の「平穩」を願う心を託しました。次に小堀遠州と前田家のつながりを示す「瀬戸茶入 銘孫六」や「梅花天目」が続き、さらには茶壺や菓子盆、懐石茶道具などを展示します。

名物裂とは、中国の宋・元・明・清の時代に製織され、鎌倉・室町時代から江戸時代中期にかけて茶事では茶室の席入りの合図として欠かすことのできない銅鑼を最初に展示します。この銅鑼は初代魚住為楽が、前田利為候に依頼され、皇紀二六〇〇年の記念として昭和十五(一九四〇)年に制作した作者会心の大作です。次の「観音羅漢像」には、白隠独特の温もりを感じさせる禅画の世界が描かれています。観音経の「慈眼視衆生、福壽海無量」の賛が記されていますが、そうした功德に新しい年の「平穩」を願う心を託しました。次に小堀遠州と前田家のつながりを示す「瀬戸茶入 銘孫六」や「梅花天目」が続き、さらには茶壺や菓子盆、懐石茶道具などを展示します。



観音羅漢像 白隠筆

第5展示室

特集展示

明治の工芸

1月4日(水)～2月6日(月)会期中無休

江戸時代に頂点を極めたとも言える、美術工芸品の製作技術は、武家社会の崩壊とともに注文主そのものがいなくなり、職人たちは相次いで廃業しました。ところが明治時代を迎え、欧米諸国への対応として殖産興業の政策が執られてから、途絶えつつあったそれらの技術が再び脚光を浴びます。輸出品として日本の伝統的な美術工芸品を製作することが奨励されたのです。

日本の伝統的な美術工芸品は、明治六年(一八七三)のウィーン万博において好評を博しました。このことにより、輸出品としての日本の工芸品に目を向けた新政府は、より一層アピールする作品を作るために、職人たちに積極的な指導を行いました。石川県はこうした施策に対して、

早くから地域的な取り組みを行っていました。明治五年(一八七二)には金沢博覧会を開催し、石川県勸業場を設置、続いて金沢銅器会社の設置や、金沢工業高校の開校など、江戸時代からの伝統工芸の復興と発展を目的としたシステムが出来上がりました。当館の所蔵品にこの時代の資料が充実しているのは、こうした背景があったことによりです。

輸出用として製作されたこれらの作品は、高い技術をアピールするため、やや装飾過剰なものが多く見られますがこれは職人たちが注文に応じて持てる技術の限りを注ぎ込んだものです。密度の濃いこれらの作品の数々をどうぞご覧ください。



「色絵金彩花詰蓋物」清水美山

第3展示室

特集展示

洋画の先駆者

佐々木三六展

1月4日(水)～2月6日(月)会期中無休

佐々木三六は万延元年(一八六〇)、福井藩士佐々木権六(長淳)の次男として福井に生まれました。父権六は嘉永七年のペリー来日に際して軍艦ホーハタン号に乗り込んで内部を偵察し、慶応三年には松平春嶽の命により渡米し、ジョンソン大統領やグラント將軍に面会、武器類の買い付けに成功、さらに藩の製造局長として銃器、西洋帆船、コールドールなどの製造を手がけ大きな功績をあげています。

三六がイタリアのトリノに留学したのは明治八年のことで、語学を習得した後、美術学校に学びました。成績は優秀でコンクールで何度も賞を得ています。帰国は十四年の年末で、その後、二十二年に日本最初の洋画団体「明治美術会」の発足に参加し、三十年に石川県尋常中学校(後金

沢第一中学、現金沢泉丘高校)に図画教師として赴任しました。下図の「石浦神社」は、三十一年に中学の校舎から眺めた石浦神社や金沢城の石垣を描いたものです。四十四年に退職するまでの間、伊東哲や遠田運雄など同校から東京美術学校西洋画科へ進み洋画家となった者が出ています。

大正十三年には金城画壇の創立に関わり、高光一也氏などの先達として活躍し、昭和三年に亡くなりました。石川県に本格的に洋画を伝えた大きな存在であり、五年の第六回金城画壇展には遺作展として四十六点が展示されています。

今回の特集ではイタリア留学時から晩年まで、油彩・水彩など四十余点を展示し、その画業を回顧いたします。



石浦神社 佐々木三六



石造りの廃屋 佐々木三六

新春を寿ぐ

1月4日(水)～2月6日(月)会期中無休

江戸時代以前の古美術を紹介する第二展示室では、「新春を寿ぐ」と題した特集展示を行います。金沢の冬は長く、寒さも厳しいですが、一足早く春の訪れを感じさせる作品を紹介します。寒い中でも蕾み、長く花を咲かせる梅は、古くから美術作品として愛でられてきました。絵画だけでなく、陶磁器・漆工品などあらゆる作品のモチーフとなり、吉祥を表すものとして、日本・中国でも用いられています。鮮やかな『黄南京梅鶯文長頸瓶』（個人蔵）は、梅とともに鶯が題材として用いられた迫力ある作品です。松竹梅と花鳥が描かれた漆器『蒔絵松竹梅花鳥三ツ組』（個人蔵）には、かつてハレの場で用いられた華やかさがあります。その他、『紅白梅図屏風』（個人蔵）

や『蒔絵梅に鶯図提重』（個人蔵）などを紹介します。一方、冬の花を題材にした作品が、加賀市指定文化財『白地水仙文縫箔小袖』（菅生石部神社蔵）です。「雪中華」とも称される水仙を刺繍した気品溢れる小袖は、大聖寺藩主前田利道の娘で、後に加賀藩十一代藩主前田治脩の正室となった法梁院所用と考えられています。なお、今回の特集で紹介するのは、個人ならびに寺社よりお預かりしている寄託作品です。公立美術館の使命として、こうした美術作品の保管がありますことを、今一度ご理解いただければ、幸いに存じます。



加賀市指定文化財「白地水仙文縫箔小袖」
(菅生石部神社蔵)

特集展示

ハレを描く日本画

1月4日(水)～2月6日(日)会期中無休

「晴れ舞台」「晴れの門出」など、今日普通に使われているハレという言葉。ハレとケは、柳田國男がその概念を見いだしてから今日まで、民俗学では重要な主題の一つとなっています。これまでも種々の論議を呼んでいます。正月や祭りなどの儀礼は「ハレ（晴）」であり、「ケ（藝）」とはその他の日常と違って差し支えないでしょう。また漁村、武家、さらには宮廷においてもそれぞれのハレやケがあります。主に農耕社会の年中行事が、ハレ・ケ・ケガレという循環型の時間概念を生んだとする説は有力です。ハレの日を設け、ケの日との違いを際立たせてきた、日本の折り目ある生活や時間の流れに、美

術はどう関係してきたのでしょうか。日本建築において「ハレの空間」ともいえる客間。中でも床の間に美術品を飾る事が定着したのは書院造りが広まった室町時代です。しかし江戸時代までは、そのような贅沢を一般庶民に禁じており、一般的にハレの日に床の間を掛け軸で飾るようになったのは明治以降といえるでしょう。今回の展示では「ハレの日を飾った日本画」「ハレの日を描いた日本画」。そして「ハレ以外の時間帯を描いた日本画」も比較展示する小特集です。現代における生活スタイルの変遷は、ハレとケを混沌とさせていますが、お正月のひととき日本人が愛でた「ハレの美」をお楽しみ下さい。



桜下人物図(部分) 紺谷光俊

今年度は中能登町で開催

平成23年度 石川県移動美術展

平成24年1月22日(日)～29日(日)会期中無休



東海道五十三次之内 蒲原 歌川広重

本年度の石川県移動美術展は、下記のとおり中能登町で開催することになりました。昭和六十二年に始まった移動美術展も、本年で二十五回を数えます。その間、県内あちこちの町を回り、これまで四万二千人を超える県民の方々にご鑑賞いただきました。作品の点数は会場の規模などの制限があり、一会場で五十点前後でしたが、当館の近現代美術コレクションを中心にそのエッセンスを抽出して展示し、少しでも美術作品に接する機会を提供させていただいたのではないかと思います。

今回の会場となる、ラピア鹿島での開催は三度目ですが、前回の展示作品のメニューを更新し、新たな美との出会いの場となるよう準備を進めています。作品は、日本画、油彩・アクリル画、彫刻等の純粹美術作品を中心に、江戸時代に制作された浮世絵版画の名品も合わせて展示する予定です。一人でも多くの方々にご来場いただければ幸いです。

1月の行事予定

8日(日)	■キッズプログラム 午後1時30分～ 2Fコレクション展示室 参加無料	雨でもハレの日なあに? 「ハレを描く日本画」親子鑑賞会
8日(日)	■上映会 午後1時30分～ 美術館ホール 入場無料	利休の茶 (45分) 16ミリ映画
15日(日)	■講演会 午後1時30分～ 美術館ホール 入場無料	山川庄太郎翁と そのコレクションについて 嶋崎 丞 当館館長
28日(土)	■講演会 午後1時30分～ 美術館講義室 聴講無料	久隅守景の眼差し 村瀬博春 担当課長
21日(土)	■講演会 午後1時30分～ 美術館講義室 聴講無料	加賀の数奇者ー山川家を中心にー 高嶋清栄 学芸第二課長
14日(土)	■講演会 午後1時30分～ 美術館講義室 聴講無料	近現代の仏像彫刻 北澤 寛 学芸専門員

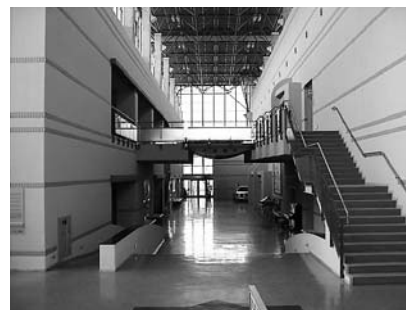
会場 ラピア鹿島(アイリスホール、ミュージズホール)
鹿島郡中能登町井田に部五〇番地
TEL 0767-76-1900

開催期間 平成24年1月22日(日)～29日(日)

開場時間 午前9時～午後5時

※初日(22日)は、午前10時から

入場料 無料



ラピア鹿島

第42回 文化財現地見学 報告

平成23年11月12日(土)~13日(日)



十一月のうらかな陽光に包まれた近江地方を、二日にわたり巡ってきました。今回の文化財現地見学は題して「近江―祈りのかたち―」。「三館連携特別展 神仏います近江」を中心に、滋賀県的美術館や寺社を巡り、豊様な近江の仏教美術を堪能する企画でした。初日、早朝からバスに揺られ、昼前に到着した信楽陶芸村で舌鼓。その後「神仏います近江」の信楽会場であるMIHOMUSEUMに向かいます。レセプション棟から美術館までのトンネルや橋を通るアプローチも、穏やかな晩秋の午後に我々を十分楽しませてくれるものでした。また企画展もさることながら、この美術館が有するコレクションには思わず唖ってしまいました。夕方、瀬田会場となる滋賀県立近代美術館に到着。美術館サポーターの方の熱を帯びた解説は、要を得て簡潔。「お陰で限られた時間の中で要領よく鑑賞ができた。」と大変好評でした。

二日目、三井寺（園城寺）へ向かいます。天台寺門宗の総本山であり、近江屈指の文化財の宝庫です。最後まで案内下さった僧侶のユーモアとうん蓄は、一時間半をとっても短く感じさせるものでした。その後、隣の大阪市歴史博物館で「日吉の神と祭り」を鑑賞し、三館連携特別展を締めくくりました。『ほとけさん』に比べ、なじみが薄い神道美術も、担当学芸員の解説で理解が深まったようです。掉尾の佐川美術館では幽玄な地下展示室で解説を頂いた後、平山郁夫、佐藤忠良、樂吉左衛門を鑑賞。中でも平山郁夫「平和の祈り―サラエボ戦跡」は、図らずも今回の現地見学のテーマ「近江―祈りのかたち―」を締め括ってくれました。

行程を通して足早な印象で、反省が残りますが、ご参加の皆様と関係各館のご協力のもと、実り深い二日間となりましたことを御礼申し上げます。

キッズプログラム

十一月十三日(日)キッズプログラム「竹となかよし、橋本仙雪さん」が行われました。今回の講座では、作品ができるまでの作業の実際を見ていただくことで、竹工芸作家橋本仙雪さんの作品のすばらしさをより身近に感じてもらうとうと、橋本仙雪さんのお弟子さんの本江和美さんをお招きしました。今ではほとんどの道具がプラスチックなどに置き換えられてしまいましたが、竹は日本では昔から木材と並んで身近に使われてきた素材でした。講座では、まず、竹が昔から日本人のくらしを支えてきたことを感じて頂くために、竹かんむりの漢字や竹の道具を考えることから始めました。その後本江さんに登場いただき、展示室の隅で竹を割りひごをつくり編むことまでの行程を見せていただいたり、熱を加えることで曲げることができるという竹の性質のお話も伺いました。参加者のお子さんはじめ保護者の方も、竹が人の手と心で美しい工芸品に変化していく過程に見入っていました。また、本江さんからの橋本仙雪さんが竹で籠を編んでいる時に「こんな楽しいことはない」と言って制作されていたというお話から、橋本仙雪さんの作品を慈しむ気持ちが伝わってきました。本江さんの子どもたちに語りかけるようなわかりやすいお話に心温まる想いを感じながら、最後の活動は、参加者それぞれが橋本仙雪さんの作品から自分のお気に入りの作品を見つけました。ご参加いただいた皆さん、ありがとうございました。



俵屋宗達 たわらやそうたつ 生没年不詳 江戸17世紀



県文 檜檜図屏風 俵屋宗達

『法華経』「方便品」には、子供が戯れに小枝及び筆、あるいは指の爪で仏を描いたとしても、この人達は徐々に徳を積み、慈悲の心を持ち、自ら仏道を成就して数え切れない人々を苦から脱し、悟りへと導くとの内容が説かれています。平安時代末、人々は、子供の戯れでこれだけの功德が得られるのであれば、大人が一心に善美をつくして造形にあたらればその功德は計り知れないと考えました。こうして『平家納経』や『源氏物語絵巻』などが誕生しました。熱心な法華宗信徒だった本阿弥光悦が、俵屋宗達とともに制作した一連の和歌巻や色紙類なども、この『法華経』の教えに立脚して王朝の美意識を復興したものでした。『檜檜図』はそうした宗達の活動を集大成したものです。地は金箔ではなく、金の切箔や砂子、微塵をまき、檜と檜を併せて椈の若木を墨に一部藍を交えて描いています。画面上部には金銀の野毛に銀の砂子、銀泥によって霞を配しています。天台法華思想は、大地に樹木の種が宿されているように、人間にも悟りの種が宿されていると説きます。それが発心によって芽吹き繁茂することを象徴的に描いたのが本図と解釈することができます。「法橋宗達」の落款の書体から、本図の制作年は一六三〇年代半ば頃、宗達の晩年と推定されます。晩年の宗達は禅僧が賛をする水墨画を描くなど、禅との関わりを強めてゆきます。本図も、そうした精神的背景から制作されたものでしょう。

一月四日から二月五日まで、企画展「古美術優品展」で展示されます。

次回の展覧会

前田育徳会 尊経閣文庫分館	第2展示室	第3展示室
春の優品選 I	刀剣と槍	寺田栄次郎展 —10cm四方の小宇宙—
会期: 2月10日(金)~3月24日(金) 会期中無休		

ご利用案内

コレクション展観覧料

一般 350円 (280円)
大学生 280円 (220円)
高校生以下 無料
※ () 内は団体料金

1月の開館時間

午前9:30 ~ 午後6:00

カフェ営業時間

午前10:00 ~ 午後7:00

1月の休館日は
1日(日) ~ 3日(火)

 やさしさ品質

お土産・和洋菓子・生鮮・惣菜・レストラン

地階 **エムザ** 食品館

広告

“もっとお客様へ、もっと地域に”

MEITETSU
MIZA
めいてつ・エムザ
金沢・石川がは 代表 TEL: 076-260-1111
http://www.meitetsumza.com/

石川県立美術館だより
第339号(毎月発行)
2012年1月1日発行
〒920-0963
金沢市出羽町2番1号
Tel: 076(231)7580
Fax: 076(224)9550
URL: <http://www.ishibi.pref.ishikawa.jp/>